



の多くは、1970年代のオイルブーム（石油価格高騰）の際、湾岸アラブ諸国に出稼ぎ者として移住してきました。しかし、いくら長く住んでも湾岸アラブ諸国のほとんどとの国では、移民政策により国籍を得られません。ビザを剥奪され、早い場合は翌日にインドに帰らなければなりません。住み続けられる保証ではなく、インド系移民の暮らしさは常に不安定。子どもたちも早くから「安心して暮らしたい」と願うようになります。この切実さが彼らのグロー・バルな活躍の根底にあるのです。

しかし、子どもたちが湾岸アラブ諸国のインド系学校に通えるのは、日本の高校卒業にあたる12年生までで、移民は大学進学をどこでするか選択する必要があります。もし親に経済力があればアメリカやヨーロッパの大学に進学したり、湾岸アラブ諸国内に設立された海外の大学の分校に進学が可能です。アメリカやヨーロッパでは卒業後に職を得てうまくいけば永住権獲得をめざすことができます。しかし、大半はインドに渡り学費が比較的安い大学に入学します。インドで就職する人もいますが、インドは人口が多く競争が激しいため、結局は湾岸アラブ諸国に舞い戻り、親と同じように移民の立場のまま就業する人も多いですが、インドは人口が多くの条件の就労先があればアメリカやヨーロッパなど世界中をフリールドに転職していくます。これがインド人が世界各国で存在感を高めている一つの要因なのです。

A photograph showing two toy models of Indian transport. In the foreground, a smaller model of a black and yellow auto-rickshaw is shown from a front-three-quarter angle. Behind it, a larger model of a black and yellow taxi is shown from a side-on perspective. Both vehicles have 'TAXI' printed on their sides.

松川教授がインド調査中に玩具屋で購入したタクシーのミニカー。実際に町を走行しているが、昔ながらの三輪タクシーは減少傾向。

**世界最先端も日本の別の側面も見える
湾岸アラブ諸国**

湾岸アラブ諸国には、あらゆる分野にいて最先端の動向が見られます。都市計画においてサウジアラビアではTHT LINEというスマートシティ計画が進中。幅200m、全長170km、高さ500mの直線型都市で、ここでは居住者の個人情報を集約し、すべてをIT管理することで先進的な生活が実現可能といわれています。また、湾岸アラブ諸国の教育分野では世界中の大学から海外分校を受け入れ、続々と設立。教育のグローバル化が加速しています。

停滞しているといわれている日本経済ですが、湾岸アラブ諸国に活躍の場を広げている企業もあります。建設分野では、実日本企業が多数進出。ドバイのメトロ建設も日本企業が建設を請け負つており、利は日本に還元されています。若者の車離れが嘆かれている自動車産業においても、利エートでは日本産高級車が多数走行。大きなショールームもそびえ立っています。市場だけを見るのではなく海外市場ま

の多くは、1970年代のオイルブーム（石油価格高騰）の際、湾岸アラブ諸国に出来稼ぎ者として移住してきました。しかし、いくら長く住んでも湾岸アラブ諸国のはんどどの国では、移民政策により国籍を得られません。ビザも数年ごとの更新が必要。職を失えばビザを剥奪され、早い場合は翌日にインドに帰らなければなりません。住み続けられる保証はなく、インド系移民の暮らしは常に不安定。子どもたちも早くから「安心して暮らせたい」と願うようになります。この切実さが彼らのグローバルな活躍の根底にあるのです。

しかし、子どもたちが湾岸アラブ諸国の一
ンド系学校に通えるのは、日本の高校卒業に

世界最先端も
日本の別の側面も見える
湾岸アラブ諸国

湾岸アラブ諸国には、あらゆる分野において最先端の動向が見られます。都市計画においてサウジアラビアではT H E L I N Eというスマートシティ計画が進行中。幅200m、全長170km、高さ500mの直線型都市で、ここでは居住者の個人情報を集約し、すべてをIT管理することで、先進的な生活が実現可能といわれています。また、湾岸アラブ諸国の教育分野では、世界中の大学から海外分校を受け入れ、続々と設立。教育のグローバル化が加速しています。

停滞しているといわれている日本経済で

インド系移民の生き方から見る、自分の未来を選び取るヒント

これから先、どの場所で、どう生きるか

世界最先端があふれる湾岸アラブ諸国と、そこで生きる人たちを通して考えてみる

湾岸アラブ諸国とは、ドバイのあるアラブ首長国連邦、クウェート、サウジアラビア、カタール、バーレーン、オマーンの6か国のこと。そこはあらゆる分野における世界最先端が詰まった場所であり、グローバルに動き続けるインド人のバックグラウンドがわかる場所でもありました。なぜ、彼らの多くは世界のさまざまな場所で活躍することができるのでしょうか。湾岸アラブ諸国に渡った中間層のインド系移民とそこで生まれた移民の子どもの調査を続ける松川恭子教授が未来の生き方のヒントについて語ります。

生きる術を獲得し
ステップアップを続ける
フィールドは世界

湾岸アラブ諸国で生まれたインド系移民の子どもは、早ければ日本の小学生にあたるころから自分の能力を意識し始めます。そして、世界のどこに行つても仕事を得ることがができる技術や知識を獲得するため、マーケティング分野やＩＴ分野を勉強したり、MBA（経営学修士）を取得するなどし、グローバルに移動できる可能性を広げていきます。そもそもなぜ、このように早くから将来の学びを考えるのでしょうか。その大きな理由が「移民」の制約にありました。



人生百年時代

世界を見たうえで、 どこで、どう生きるか

遠く離れた海外の暮らしを見て、実際に見て、自分の住む社会に立ち返る。世界中にある生き方を知り、自分の人生を見つめ直す。いつしかライフスタイルまで変わってくる。これが私の研究している文化人類学の面白いところです。

留学では自分の常識が通用しない社会で暮らし、失敗を重ねることで新しい方法

The image shows a book cover for '世界を横流する(インド)' by Matsukawa, featuring a colorful sari. To its right is a magazine spread with a person in traditional Indian attire and a grid of books, likely related to the topic of multilingualism in India.

ドバイは人口の90%以上、クウェートは70%以上が外国人であるなど、自国民よりも移民のほうが多い「多外国人国家」であり、異文化が混在するグローバル社会です。社会を動かしている多くが移民であるのもグローバル社会の最先端といえるのではないでしようか。日本も労働力を外国人に頼り始めていますが、外国人と共生する社会もそう遠くはなく、学ぶところも多いと考えます。

世界をフィールドにしたキャリア設計や生き方を考えたとき、もはや欧米諸国との情報だけでは不足です。グローバル教育が広がりを見せた日本ですが、義務教育で学習する言語が英語のみというのも、すでに時代にそぐわなくなつてきています。英文法や英単語を細かく学ぶよりは、もう1言語を加え、学ぶほうがグローバルに活躍できるチャンスが広がります。人気の韓国・朝鮮語、国力が上がつてきているインドネシア語などに目を向けてみると良いと思います。

穟と日本との見合せ言語で、なにかあります。また、海外に行かなくても近所のスーパー・マーケットにある外国産の食べ物や製品をきっかけにその国の状況を知ることができたり、たとえば大学の講義で海外について学べば、自分の生きる社会を考察することができます。

このように世界を知ることは大切ですが、すべての人がグローバルに打って出る必要はないでしょう。休暇の取りやすい仕事やを選んでゆつたりと過ごす生き方や、自給自足の生活を選んでも良いでしょう。安い医療費や年金制度にメリットを感じ日本に住み続けるのも一つの選択です。

世界の多様な社会をることで、先見の明を養うことができ、自分の生きる社会や生きていく術を考えられます。文化人類学者は言わば、未来を生き抜くためのサバイバル術が詰まった学問。20年後、30年後の日本や自分を見据え、世界を知り続け、あらゆるライフステージでの生き方に役立ててほしいと思います。

しかし、大半はインドに渡り学費が比較的学に入ります。インドで就職する人ですが、インドは人口が多く競争が激しく、結局は湾区アラブ諸国に舞い戻り、親のように移民の立場のまま就業する人がいるのが現状です。しかし、彼らはいずれに進んでもより良い条件の就労先があれば、メリカやヨーロッパなど世界中をフリー転職していきます。これがインド人が吉国で存在感を高めている一つの要因な

大きなショールームもそびえ立っています。しかし、就職活動でめざす業界があるなら日本市場だけを見るのではなく海外市場まで



人生百年時代

世界を見たうえで、 どこで、どう生きるか

遠く離れた海外の暮らしを見て、実際に見て、自分の住む社会に立ち返る。世界中にある生き方を知り、自分の人生を見つめ直す。いつしかライフスタイルまで変わってくる。これが私の研究している文化人類学の面白いところです。

留学では自分の常識が通用しない社会で暮らし、失敗を重ねることで新しい方法